

## 現代能楽の音便

坂本清恵

### 1. はじめに

「口承資料としての能楽研究」として、中世に始まった芸能である能楽が、現在どのように発祥当時の音声をとどめているのかについて研究を行ってきた<sup>(1)</sup>。近畿地域を発祥とし、そのことばを受け継いでいはいはいるが、能楽のうち謡と狂言では、文法、音声ともに異なるものを伝承していて、現代の謡と狂言がそれぞれいつの時代の口語を継承しているのか判然としない。ここでは現代でも地域差が顕著な音便に注目して、現代の謡本と狂言台本に現れる音便を調べ、現代の能と狂言の相違、それぞれの流儀による相違について分析を行い、さらなる研究の端緒としたい。

音便は調音点によって異なる音便になる。サ行イ音便は、近畿地域においても徐々に減少するが、それをどの芸能のどの流儀が現在まで伝えているのか。ワ行は、近畿地域の音便特徴として現代もウ音便であり、関東の促音便との相違がみられる。バ行マ行は関東ではともに撥音便であるが、近畿地域ではマ行は撥音便もみられ、また、バ行マ行がウ音便と撥音便とどちらを伝えているのかが問題となる。各流儀がどこで伝承したのかも大いに影響があるのであろう。

### 2. 対象資料について

謡については世阿弥自筆本の残されている『難波』『江口』『柏崎』『盛久』と『八島』『卒都婆小町』『雲林院』『羽衣』について、金春流、観世流、宝生流、金剛流、喜多流の五流の現行謡本から音便形、非音便形を抽出し、五段動詞連用形についてまとめた。

狂言は大蔵流茂山家と和泉流野村家の台本を用いる。大蔵流は、平成26年度に日本女子大学文学部日本文学科で入手した大蔵流茂山家の狂言台本27冊のうち、『千鳥』『狐塚』『入間川』『末廣がり』4作品を扱う<sup>(2)</sup>。

これは、茂山眞一（十一世茂山千五郎、三世茂山千作、明治29年8月30日～昭和61年7月19日）が、184曲の茂山千五郎家の現行台本を整理しており、女子大蔵の台本も同じ時期に書き留められたものである。

和泉流は、大正9年に刊行された野村萬斎『新編狂言正本 三巻』（わんや書店）の『夷大黒』『舟渡賀』『二人袴』『子盗人』『鐘の音』について、それぞれの音便使用状況を調査した。

### 3. イ音便

ここでは、五段動詞のサ行、カガ行の連用形がイ音便、非音便のどちらで現れるかについてまとめた。

#### 3-1. 謡本のイ音便

イ音便について曲ごとに音便化についてまとめたもの次の表である。

##### 【曲別動詞イ音便数】

|     | サ行イ音便  | サ行非音便  | カガ行イ音便  | カガ行非音便  |
|-----|--------|--------|---------|---------|
| 江口  |        | 1例(1語) |         | 1例(1語)  |
| 柏崎  | 4例(1語) | 3例(2語) | 16例(4語) | 8例(3語)  |
| 雲林院 |        | 6例(1語) |         | 1例(1語)  |
| 卒都婆 |        | 8例(2語) | 8例(1語)  | 13例(2語) |
| 難波  |        | 8例(2語) | 3例(1語)  |         |
| 羽衣  |        | 5例(1語) |         |         |
| 盛久  |        | 6例(2語) | 12例(3語) | 2例(1語)  |
| 八島  |        | 9例(2語) |         | 1例(1語)  |
| 弱法師 |        | 9例(1語) | 8例(2語)  | 11例(4語) |

サ行イ音便について流儀別に用例をまとめると次のとおりである。

##### 【流儀別サ行イ音便例】

|    | サ行イ音便 | サ行非音便  |
|----|-------|--|
| 金春 | 着なす1  | 映す1, 落とす1, 散らす, 成す3, 浸す1, 生す1, 申す1             |
| 観世 | 着なす1  | 映す1, 落とす1, 散らす2, 成す3, 浸す1, 臥す2, 見做す1, 燃す1, 申す2 |
| 宝生 |       | 映す1, 落とす1, 成す2, 浸す1, 臥す1, 申す2                  |
| 金剛 | 着なす1  | 映す1, 落とす1, 散らす1, 成す3, 浸す1, 臥す3                 |
| 喜多 | 着なす1  | 映す1, 出す1, 散らす, 成す3, 臥す2, 見做す1, 申す2             |

サ行イ音便は『柏崎』に出現する「着ないて」の1語のみである。これ

は世阿弥自筆本でも「キナイテ」とイ音便で現れる。世阿弥自筆本のサ行動詞の他例は「カザシテ、ヲモイイタシテ、ナシテ、ミナシテ、ムシテ」と非音便形である<sup>(3)</sup>。世阿弥時代からサ行イ音便であったもののみが、現在でも伝わっているとみていいのであろう。

この『柏崎』のイ音便は、後シテが、亡き夫の形見の烏帽子、直垂を着けて思い出を語る部分に現れる。現代では以下のとおり、それぞれの流儀で、当該箇所の前後も含め、音便使用の相違がみられる。

金春流では、ワ行「舞う」と「美しく」もウ音便である。

いで殿ばらに乱舞(ランブ)まう(オ)て見せんとて。よろいびたたれ取りいでて。衣紋うつくしう着ないて。へんぬり取ってうちかけ。

観世流では、ワ行「舞う」はウ音便であるが、形容詞連用形「美しく」は原形である。

いで人々に乱舞(ランブ)舞う(モオ)て見せんとて。鎧直垂(ヨロイビタタレ)取り出し。衣紋美しく著ないて。縁塗(ヘリヌリ)取ってうち被き。

宝生流では、本文に「着なす」を含んでいない。

いで乱舞(ラップ)まふて(モウテ)見せんとて。鎧直垂(ヨロイビタタレ)取り出だし。へりぬりとって打ちかづき。

金剛流は、この部分の音便については、金春流、喜多流と同じである。

いで殿原に乱舞(ランブ)まうて見せんとて。鎧直垂(ヨロイビタタレ)取り出で。えもん美しう着ないて。縁塗(ヘンヌリ)取て(トツテ)打かけ。

喜多流もこの部分の音便については、上に述べたとおりである。

いで殿ばらに乱舞(ランブ)舞うて見せんとて。鎧直垂(ヨロイビタタレ)取り出でて。衣紋美しう著(キ)ないて。縁塗(ヘンヌリ)取って打懸け。

この部分、世阿弥自筆本では、形容詞連用形が原形のままである。「取る」の促音便は無表記である。

マイマウテ ミセントテ ヨロイヒタ、レトリイタシ エモンウツクシクキナイテ へんヌリトテウチカケ

なお、動詞以外では、諸本にみられる「乱舞」は世阿弥自筆本にはなく、宝生流では撥音を促音に変えた「ラップ」である。形容詞連用形も世阿弥自筆本は非音便形で現在の観世流と同じである。また、世阿弥自筆の「へんヌリ」を観世流、宝生流では非音便形の「へりヌリ」に戻している。世阿弥自筆本から現代までにさまざまに改編されていることがわかる。

次にカガ行のイ音便について流儀別に例を挙げる。

【流儀別カガ行イ音便】

|    | カガ行イ音便                                 | カガ行非音便                                |
|----|--|---------------------------------------|
| 金春 | 急ぐ1, 於く2, 被く1, 聞く2, 接ぐ1, 鳴く1, 披く1      | 受け継ぐ1, 着く3, 憑く1, 歎く1, 響く1, 導く1, 行く1   |
| 観世 | 急ぐ2, 於く3, 書く1, 被く1, 聞く1, 接ぐ1           | 受け継ぐ1, 聞く1, 憑く, 着く1, 就く, 歎く1, 導く, 行く1 |
| 宝生 | 急ぐ1, 於く1, 被く1, 聞く2, 接ぐ1, 鳴く1, 披く1      | 受け継ぐ1, 着く1, 憑く1, 歎く1, 導く1, 行く1        |
| 金剛 | 急ぐ1, 於く2, 書く1, 被く1, 聞く2, 接ぐ1, 鳴く1, 披く1 | 受け継ぐ1, 憑く1, 歎く1, 導く1, 行く1             |
| 喜多 | 急ぐ1, 書く1, 被く1, 聞く1, 接ぐ1, 鳴く1, 披く1      | 受け継ぐ1, 立ち退く1, 着く1, 憑く1, 導く1, 行く1      |

カガ行はサ行イ音便に比して、半数程度が音便形で現れる。地謡の部分に非音便形がやや多いようである。

3-2.狂言のイ音便

狂言のサ行イ音便については、大倉浩氏が、四種の版本狂言記におけるイ音便形の調査から、正篇刊行当時の十七世紀半ばには、京都方言から「さす」以外のイ音便形はほとんど衰退していたこと、狂言用語としてイ音便形が定着する過程に、イ音便形を避けた時期・流派があったこと、和泉流の固定期の台本が、卑俗な表現としてその使用を避けたのではないかとしている(4)。

| 和泉流野村家 |        | 大蔵流茂山家   |        |
|--------|--------|----------|--------|
| サ行イ音便形 | サ行非音便形 | サ行イ音便    | サ行不明   |
| 致す7    | いなす2   | 致す 5     | 思し召す 2 |
| 被らかす1  | 出す2    | 追い走らかす 4 | 指す 1   |
| 出来す1   | 被らかす1  | 追い払らかす 1 | 済ます 1  |
|        | 切り離す1  | 遣す 1     | 出す 2   |
|        | 潰す1    | 翳す 1     | 話す 1   |
|        | 燈す1    | 食わす 1    |        |
|        | 取り散らす1 | 探す 1     |        |
|        | 直す1    | 済ます 3    |        |
|        | 流す1    | 出す 5     |        |
|        | 申す3    | でかす 2    |        |
|        | 許す3    | 直す 5     |        |
|        | 渡す1    | 流す1      |        |
|        |        | 成す 3     |        |
|        |        | 話す 3     |        |
|        |        | 囃す 1     |        |
|        |        | 許す 1     |        |

本調査でも、表のとおり、和泉流野村家の台本にはイ音便が少なく、大蔵流茂山家の台本にイ音便が多く、相違がはっきりしている。また、大倉氏が狂言記正編のイ音便の例が「さす」をはじめ、全て語幹末母音がア列

音の動詞の例であると指摘しているが、和泉流野村家台本のイ音便の例がこれに合致し、「致す」「被らかす」「出来す」に現れている。

これに対して、大蔵流茂山家の台本には「直す」「許す」という語幹末がア列音以外のイ音便もある。漢字表記に送り仮名がなく、音便形かどうかがわからななものもあるが、これらも「指す」「済ます」「出す」「話す」など語幹末がア列音の例であり、イ音便形で発音されるのであろう。

今回の和泉流野村家台本、大蔵流茂山家台本はともに素人向けのものである。野村家では口伝えで習い、サ行イ音便を使っている意識がないようである(5)。一方、大蔵流茂山家は京都で伝承を続け、サ行イ音便を多く取り込んでいったのではないだろうか。伝承地がどこであったか、いつ発祥地から離れたかなどが、現代の台本にも相違として現れているのであろう。

また、カガ行イ音便は、両家の台本とも基本的にはイ音便である。

例外は、和泉流野村家の「行く」は語幹がイ列音であるために、イ音便では現れない。例は、『夷大黒』のアドが名乗りの座でアドが「帰る嬉しき故郷に行きて妻子に逢はうよ」と謡う部分である。大蔵流茂山家の台本のカガ行不明は漢字に送り仮名がないことによるもので、イ音便例なのであろう。

| 和泉流野村家 |        | 大蔵流茂山家 |        |
|--------|--------|--------|--------|
| カガ行イ音便 | カガ行非音便 | カガ行イ音便 | カガ行不明  |
| 明く 1   | 行く 1   | 急ぐ 5   | 置く 3   |
| 急ぐ 1   |        | 措く 1   | 書く 1   |
| 置く 10  |        | 置く 1   | 聞く 1   |
| 措く 1   |        | 付く 1   | 登りつく 1 |
| 嗅ぐ 1   |        | 注ぐ 1   |        |
| 聞く 2   |        | 引き続く 1 |        |
| 好く 1   |        | 開く 1   |        |
| 抱く 1   |        | 巻く 1   |        |
| 着く 1   |        |        |        |
| 注ぐ 4   |        |        |        |

#### 4. ウ音便・撥音便

近畿方言では、ワ行ウ音便、バ行とマ行がウ音便と撥音便のどちらで現れるのかが問題になる。

##### 4-1. 謡本

それぞれの曲で以下のとおりの音便例が見られた。特にワ行はウ音便と促音便に分かれ、非音便例はハ行転呼音の例である。謡本では、バマ行にウ音便の例はない。

【曲別音便数】

|     | ワ行ウ音便  | ワ行促音便  | ワ行非音便   | バ行撥音便  | バ行非音便  | マ行撥音便   | マ行非音便   |
|-----|--------|--------|---------|--------|--------|---------|---------|
| 江口  |        |        | 6例(2語)  |        |        |         | 5例(1語)  |
| 柏崎  | 8例(2語) |        | 23例(5語) |        |        |         |         |
| 雲林院 |        | 2例(1語) | 1例(1語)  |        |        |         | 5例(1語)  |
| 卒都婆 | 9例(2語) |        | 11例(2語) |        |        |         |         |
| 難波  |        | 9例(1語) | 1例(1語)  |        |        |         | 11例(2語) |
| 羽衣  |        | 5例(1語) | 8例(2語)  |        | 5例(1語) |         |         |
| 盛久  |        | 6例(2語) | 19例(6語) | 2例(1語) |        |         |         |
| 八島  | 2例(1語) | 4例(1語) | 13例(5語) |        | 3例(1語) | 15例(3語) |         |
| 弱法師 |        | 1例(1語) | 13例(5語) |        |        |         |         |

【流儀別ワ行音便例】

|    | ワ行ウ音便         | ワ行促音便          | ワ行非音便   |
|----|---------------|----------------|---|
| 金春 | 弔う1, 舞う1, 報う1 | 言う3, 思う1, 添う1  | 失う2, 映ろう1, 思う2, 添う5, 候1, 給う2, 計らう1, 拾う1, 惑う1, 向かう1, 宣う1                     |
| 観世 | 添う1, 舞う1, 報う1 | 言う4, 思う1       | 言う3, 失う1, 歌う1, 映ろう1, 叶う1, 誘う1, 添う5, 候う2, 戦う1, 給う3, 弔う2, 拾う1, 惑う1, 向かう2, 宣う1 |
| 宝生 | 添う1, 舞う1, 報う1 | 言う3, 思う1, 向かう1 | 失う1, 歌う1, 映ろう1, 思う2, 添う5, 候う2, 給う2, 弔う3, 拾う1, 惑う1, 向かう1, 宣う1                |
| 金剛 | 弔う3, 舞う1, 報う1 | 言う3, 思う1, 添う1  | 失う1, 歌う1, 映ろう1, 思う2, 叶う1, 添う3, 候う1, 給う1, 惑う1, 向かう1, 宣う1                     |
| 喜多 | 弔う1, 舞う1, 報う1 | 言う3, 思う1, 添う1  | 失う1, 歌う1, 映ろう1, 思う1, 添う5, 給う2, 計らう1, 拾う1, 向かう1, 宣う1                         |

謡ではサ行イ音便と同様にワ行も非音便形が圧倒的に多い。音便例が特別な意味を持つと考えてよい。

ウ音便例のうち、すべての流儀で共通するのは、サ行イ音便で挙げた「舞うて」『柏崎』と、「今百年になるが報うて」『卒都婆小町』の例で、ともに後シテのことばである。前者が狂女、後者が憑依された老女のことばである。

促音便例のうち、すべての流儀で共通するのは、「近き身を思つて（オモッテ）」『盛久』、「王仁と云つし（イッシ）」『難波』、「久方の天といつぱ（イッパ）」『羽衣』の例で、それぞれ盛久、王仁、天人のことばである。

世阿弥自筆本では、『難波梅』は「チカキミヲ、モテ」で、促音無表記である。世阿弥自筆本では、促音便は無表記が多く、「ッ」表記は促音便全体の3割ほどである。

『難波梅』の該当部分は世阿弥自筆本では、音便形にならない「ワウニントイエル」で現代の謡本とは文章が異なる。ただし、「言う」について

は世阿弥自筆本『難波梅』に、同じ後シテである王仁のことばに「タレカイシ」の促音無表記例がある。王仁のことばであるため、「イイシ」ではなく「イッシ」が現れると思われるが、現在、両例とも「イッシ」なのは金春流、宝生流、金剛流、喜多流で、観世流のみ「誰か言ひ(イイ)し」とする。

流儀で揺れるのが「添う」「弔う」である。

「添う」は『八島』のツレのことばで、『古文真宝前集』掲載の柳子厚「漁翁」からの漢詩引用部分である。

金春流では「漁翁夜西岸に傍(ソツ)て宿す」と促音便で、金剛流、喜多流も同様である。

観世流では「漁翁夜西岸に傍う(ソオ)て宿す」とウ音便である。

宝生流では「漁翁夜西岸にそふて宿す」とウ音便である。

この例については、光悦謡本、明和改正謡本はウ音便、車屋本は促音便で、江戸時代から揺れが見られる。

「弔う」は『柏崎』の後シテのことばである。

金春流では「いや心があらば訪ろう(トムロオ)てこそ慰むべけれ」とウ音便で、金剛流、喜多流も同じである。

観世流は「うたてやな心あらん人は。訪ひ(トムライ)てこそ賜ふべけれ」とハ行転呼音の非音便形である。宝生流も文言は多少違うが、ハ行転呼音の非音便形である。

ここは世阿弥自筆本では「トフラウテ」としたものを後から「ウテ」を消して、「トフライ」に変更したようであり、その変更前と後とが現在に継承されたのではないか。

バマ行についてまとめると以下のとおりである。

【流儀別バマ行音便例】

|    | バ行撥音便 | バ行非音便 | マ行撥音便          | マ行非音便         |
|----|-------|-------|----------------|---------------|
| 金春 |       | 及ぶ2   | 浮かむ1, 汲む1, 摺む1 | 霞む2, 汲む1, 染む1 |
| 観世 |       | 及ぶ1   | 浮かむ1, 汲む1, 摺む1 | 霞む2, 汲む1, 染む2 |
| 宝生 | 忍ぶ1   | 及ぶ1   | 浮かむ1, 汲む1, 摺む1 | 霞む2, 汲む1, 染む1 |
| 金剛 | 忍ぶ1   | 及ぶ2   | 浮かむ1, 汲む1, 摺む1 | 霞む2, 汲む1, 染む1 |
| 喜多 |       | 及ぶ2   | 浮かむ1, 汲む1, 摺む1 | 霞む2, 汲む1, 染む1 |

バ行撥音便の例は、『盛久』のワキ土屋の名乗り部分「丹後の国成相事に忍んで御座候を」であるが、音便例のあるのが宝生流と金剛流である。

バ行非音便は『八島』ワキ僧の「合戦の巷と承り及びて候」の金春流、

金剛流、喜多流例と、『羽衣』ワキの「承り及びたる天人の舞楽」各流の例である。

マ行撥音便の例は、五流とも「月海上に浮かんでは」、「暁湘水を汲んで」、「鑊を擱んで」といずれも『八島』の例である。非音便の例は、五流共通のシテ「一河の流れの水。汲みても」『江口』、シテ「花に心を染みて」『雲林院』、ワキ次第「山もかすみて」『難波』と、観世流のみワキ・ワキツレ「景色に染みて」『難波』の例がある。世阿弥自筆本『難波梅』は非音便で、次第「山ハカスミテウラノ春」、待謡「ケシキニソミテ」である。後者の例は観世流のみが世阿弥自筆本の文章を受け継いでいる。

バマ行については、『平家物語』を題材とした曲に音便形が現れる。世阿弥自筆本は、バマ行については非音便形のみである。

#### 4-2 狂言

狂言では、謡と異なりワ行には促音便の例がみられない。基本的に音便化している。

| 和泉流野村家 |        |        | 大蔵流茂山家 |      |       |      |       |       |      |
|--------|--------|--------|--------|------|-------|------|-------|-------|------|
| ワ行ウ音便形 | バ行ウ音便形 | マ行ウ音便形 | ワ行ウ音便  | ワ行不明 | バ行撥音便 | バ行不明 | マ行ウ音便 | マ行撥音便 | マ行不明 |
| 言う18   | 呼ぶ5    | 打ち込む2  | 会う3    | 会う2  | 飛ぶ1   | 飛ぶ1  | 頼む20  | 済む2   | 済む3  |
| 唄う1    |        | 囲む1    | 商う1    | 言う11 |       |      | 飲む1   |       | 飲む2  |
| 思う6    |        | すっこむ1  | 言う1    | 追う2  |       |      |       |       |      |
| 違う1    |        | 飲む4    | 追う1    | 違う1  |       |      |       |       |      |
| 手伝う1   |        |        | 思う7    | 問う1  |       |      |       |       |      |
| 取り繕う1  |        |        | 仕舞う1   |      |       |      |       |       |      |
| 振舞う1   |        |        | 違う3    |      |       |      |       |       |      |
| 雇う1    |        |        | 手伝う1   |      |       |      |       |       |      |
| 笑う1    |        |        | 習う1    |      |       |      |       |       |      |
|        |        |        | 見舞う2   |      |       |      |       |       |      |
|        |        |        | 貰う2    |      |       |      |       |       |      |
|        |        |        | 寄り合う1  |      |       |      |       |       |      |

用例は少ないが、和泉流野村家の対象4曲にはバマ行の撥音便例がみられず、ウ音便が現れる。謡にバマ行のウ音便例が現れにくいのは対照的に狂言ではウ音便が狂言らしさを表す。

バ行は「呼うで」『二人袴』『舟渡聲』の例のみ、マ行では大蔵流でも「飲うだ」『二人袴』『舟渡聲』の他、「打ち込うで」「囲うで」『子盗人』、「すっこうで」『舟渡聲』の例である。

大蔵流茂山家の台本にはバマ行に撥音便例、マ行にウ音便例がみられる。バ行撥音便は「とんたり(飛)」『千鳥』、マ行撥音便は「済んだ」『入間川』「済んで」『千鳥』、マ行ウ音便は「頼ふだ御方」『千鳥』『狐塚』『入間川』

『末廣がり』、「呑ふだ」『狐塚』の例である。

なお、参考までに国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」で大蔵虎明本の例をみると、以下のように、延べ語数が、バ行は撥音便 27 例、ウ音便 63 例で、マ行は撥音便が 62 例、ウ音便が 244 例である。江戸時代初期の状態として、バ行もマ行もともにウ音便形が優勢であり、現代もウ音便で現れる「飲む」「頼む」などは使用例も多く、ウ音便が定着していたとみられる。

| バ行撥音便 | バ行ウ音便   | マ行撥音便  |      | マ行ウ音便  |        |        |
|-------|---------|--------|------|--------|--------|--------|
| 遊ぶ1   | 聞き及ぶ 11 | 埋む 1   | 済む 8 | 浮かむ1   | 込む 1   | 引っ込む 3 |
| 喚き叫ぶ1 | 転ぶ 4    | 生む 1   | 住む 5 | 打ち込む 2 | 嗜む 1   | まどろむ 2 |
| 及ぶ1   | 忍ぶ 4    | 押し揉む 1 | 巧む 1 | 追い込む 1 | 頼む 142 | 揉む 2   |
| 転ぶ2   | 運ぶ 2    | 搔き掴む 1 | 佇む 1 | 拝む 1   | 掴む 1   | 止む 1   |
| 飛ぶ12  | 学ぶ 2    | 霞む 2   | 盗む 8 | 押し込む 1 | 慰む 2   | 読む 36  |
| 結ぶ9   | 結ぶ 1    | 汲む 14  | 臨む 1 | おっ込む 2 | 馴染む 3  | 脇挟む 1  |
| 呼ぶ1   | 呼ぶ 30   | 組む 5   | 挟む 1 | 屈む 6   | 飲み込む 1 |        |
|       | 喜ぶ 9    | 進む 1   | 含む 1 | 搔き込む 1 | 飲む 29  |        |
|       |         |        | 踏む 6 | 噛む 1   | 挟む 1   |        |
|       |         |        | 休む 4 | 好む 2   | 食む 1   |        |

## 5. 促音便

促音便はすでに4でハ行促音便の例については触れたので、ここではタラ行について触れる。タラ行には促音便以外の例がない。

### 5.1 謡の促音便

謡の音便例のうちラ行促音便が他の音便例に比べて音便化率が高い。

#### 【曲別動詞促音便数】

|     | タ行促音便   | タ行非音便   | ラ行促音便   | ラ行非音便   |
|-----|---------|---------|---------|---------|
| 江口  |         | 10例(1語) | 4例(1語)  | 15例(4語) |
| 柏崎  |         | 8例(2語)  | 5例(1語)  | 33例(6語) |
| 雲林院 |         |         | 10例(2語) | 14例(4語) |
| 卒都婆 |         | 3例(1語)  | 17例(2語) | 7例(2語)  |
| 難波  |         |         | 1例(1語)  | 27例(6語) |
| 羽衣  | 5例(1語)  |         | 5例(1語)  | 26例(5語) |
| 盛久  | 12例(1語) |         | 14例(4語) | 10例(3語) |
| 八島  | 4例(1語)  |         | 44例(9語) | 11例(4語) |
| 弱法師 |         | 4例(1語)  | 22例(4語) | 29例(5語) |

上の表をみると、ラ行促音便が非音便例よりも延べ、異なりともに多いのは『盛久』『八島』であり、タ行も促音便の例のみである。『平家物語』

を題材にしていることにより音便形が多く現れるといえる。

以下のように、夕行「持つ」は音便形の例は「以って」とすべき例で、動詞本来の使い方から離れてはいるが、ここに載せた。なお、世阿弥自筆本ではこの例も含め、夕行は非音便形の例のみで、ラ行は52例中14例が促音無表記の促音便例で、「コソツテ」『阿古屋』のみが促音表記の例である。

【流儀別促音便例】

|    | 夕行促音便          | 夕行非音便         | ラ行促音便  | ラ行非音便   |
|----|----------------|---------------|--|---|
| 金春 | 立つ1, 持つ2       | 旅立つ2, 持つ3     | 有る2, 入る1, 移る1, 折る, 掻い取る4, 去る1, 積もる2, 取る1, 寄る2, 渡る1                                     | 入る1, 打ち乗る1, 思いよる1, 折る1, 帰る2, 来る1, 被る2, 立ち寄る2, 散る1, 連なる1, 留まる2, 取る3, 成る5, 参る5                          |
| 観世 | 立つ1, 持つ2, 分かつ1 | 旅立つ2, 持つ3     | 有る2, 入る1, 移る2, 折る2, 買いとる2, 掛かる, 畏まる1, 語る2, 去る2, 積もる1, 取る2, 引きちぎる1, 依る2, 渡る1            | 有る2, 入る2, 承る1, 打ち乗る1, 思いよる1, 折る1, 帰る5, 被る3, 象る1, 散る1, 積もる2, 留まる2, 取る3, なる4, 降る1, 参る4, 寄る3, 渡る1        |
| 宝生 | 立つ1, 持つ2, 分かつ1 | 旅立つ2, 持つ4     | 有る2, 入る2, 承る1, 移る1, 折る2, 掻い取る4, 掛かる1, 畏まる1, 語る2, 去る2, 引きちぎる, 積もる1, 取る2, 名乗る1, 寄る2, 渡る1 | 有る2, 入る1, 思いよる1, 折る1, 帰る3, 変わる1, 被る2, 立ち寄る1, 散る1, 積もる1, 連なる1, 留まる2, 取る3, 成る6, 登る1, 降る1, 参る4, 寄る1, 渡る1 |
| 金剛 | 持つ3, 分かつ1      | 旅立つ2, 立つ, 持つ2 | 有る2, 入る1, 折る2, 移る1, 掻い取る3, 掛かる1, 語る1, 去る2, 積もる1, 取る2, 名乗る1, 引きちぎる1, 寄る4, 渡る1           | 入る1, 思いよる1, 帰る3, 象る1, 被る2, 叱る1, 立ち寄る2, 連なる1, 積もる1, 留まる2, 取る2, 成る6, 登る1, 降る1, 参る3, 寄る1, 渡る1            |
| 喜多 | 持つ3, 分かつ1      | 旅立つ2, 持つ1     | 有る2, 入る1, 折る2, 移る1, 掻い取る3, 掛かる1, 語る1, 去る2, 積もる1, 連なる1, 取る2, 名乗る1, 引きちぎる1, 寄る2, 渡る1     | 有る1, 打ち乗る1, 思いよる1, 折る1, 帰る3, 象る1, 被る1, 立ち寄る2, 散る1, 積もる1, 留まる2, 取る3, 成る4, 登る1, 降る1, 参る4, 寄る2, 渡る1      |

5.2 狂言における促音便

他の音便と同様に基本的にはタラ行とも促音便で現れる。

| 和泉流野村家 |         |         |        |       |
|--------|---------|---------|--------|-------|
| タ行促音便  | ラ行促音便   |         |        | ラ行非音便 |
| 出で立つ 1 | 上がる 4   | 変る 2    | 直る 1   | 手折る 1 |
| 打つ 1   | 有る 9    | 斬る 1    | 成る 5   |       |
| 待つ 5   | 承る 6    | 潜る 3    | 依る 23  |       |
| 持つ 10  | 送る 1    | 蒙る 1    | 取る 1   |       |
|        | お静まる 1  | ござる 5   | 寝入る 1  |       |
|        | 押し通る 1  | こそぐる 1  | 申し切る 1 |       |
|        | 遅なわる 1  | 指し当たる 1 | 乗る 1   |       |
|        | 思ひ当たる 1 | 叱る 1    | 這入る 2  |       |
|        | 帰る 1    | 知る 3    | 参る 6   |       |
|        | 掛かる 1   | 忍び入る 2  | 回る 6   |       |
|        | 畏まる 25  | 剃る 5    | やる 4   |       |
|        | 語る 1    | 釣る 1    | 寄る 1   |       |
|        | 借る 1    | 止まる 5   |        |       |

| 大蔵流茂山家 |       |        |        |        |       |
|--------|-------|--------|--------|--------|-------|
| タ行促音便  | タ行不明  | ラ行促音便  | ラ行無表記  | ラ行不明   |       |
| 持つ 1   | 待つ 2  | 誤る 1   | おあやる 1 | 当たる 1  | 取る 8  |
|        | 持つ 25 | 言う 1   | おしゃる 1 | 余る 3   | 成る 9  |
|        |       | 居る 4   | 居る 1   | 有る 10  | 乗る 1  |
|        |       | 頬ばる 1  | 呼ばわる 2 | 入る 5   | 上る 1  |
|        |       | 呼ばわる 2 |        | 移る 2   | 這入る 1 |
|        |       |        |        | 折る 2   | 参る 8  |
|        |       |        |        | 限る 4   | 戻る 7  |
|        |       |        |        | 畏まる 11 | 遣る 3  |
|        |       |        |        | 御座る 2  | 依る 39 |
|        |       |        |        | 知る 2   | 渡る 1  |
|        |       |        |        | 詰まる 1  |       |

大蔵流茂山家の例には、ラ行促音便が表記されない促音無表記例がある。すべて『末廣がり』の例である。「今身共に御逢やたが仕合と云事じゃ」「今おしやたは。何事ぞ」「たらしおたな」「加様に呼わてありく事で御座る」である。

しかし、『末廣がり』の例のすべてが促音に無表記なのではなく、促音の表記がゆれているとみられる。補助動詞の「おる」は無表記の他、「たらされおったそふな」「弥々ぬかれおったそふな」と促音表記例もある。

## 6. おわりに

中世芸能として伝わっている能楽の現代の姿について、音便を例に取り上げてみた。謡と狂言では、謡は音便化率が低いが、狂言は通常、音便形で演じられる。さらに、謡と狂言それぞれについても、流儀によって異なる

る形で音便を伝えている。つまり、現代の伝承された形が大きく異なっているということである。

現代でも西日本に各所で残っているサ行イ音便については、謡ではごくまれで、今回の調査では、世阿弥自筆本で使われていた「キナイテ」『柏崎』が五流で伝えられており、サ行イ音便は狂女という特別な役柄に用いられる音便として伝えられた可能性が高い。一方、狂言では、サ行イ音便は、京都で伝承をしてきた茂山家では盛んに用いられているが、これは京都の狂言らしさを表現するためにサ行イ音便を多く取り込んでいった結果なのではないか。これに対して早く京都を離れた野村家ではわずかな例のみが現れる。おそらく、野村家の台本は京都を離れたときのサ行イ音便が衰退した状況のまま固定してしまったのではないかと考えられる。

近畿方言ではウ音便、関東では促音便のワ行については、謡では狂女、老女にウ音便、『平家物語』を題材とするものに促音便が現れることがある。狂言ではウ音便形のみが現れる。

バマ行については、謡では撥音便のみで、ウ音便がない。狂言では用例が少ないが、和泉流野村家の台本にはウ音便のみで、大蔵流茂山家の台本にはウ音便と撥音便がみられる。

現代能楽は流儀による相違が大きく、発祥時の日本語の姿を留めているとすることはできない。それぞれの流儀が伝承の過程での変化を取り込んだり、あるいは特徴的に音便形を取り入れたりして、現代に至っているであろう。

今回は、現代に伝わっている曲の一部を扱い、音便の現れる傾向をみたにとどまるが、いずれ現行曲全体の様相について把握したい。

#### 注

- (1) 法政大学野上記念能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」の公募型共同研究に採択した研究結果の一部である。
- (2) 坂本清恵・加野友理・野見山優・野中くれあ(2016)「大蔵流茂山家狂言台本の翻刻と紹介」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』22号
- (3) 坂本清恵(2002)「近代語の発音－謡曲伝承音との関係－」『国語と国文学』79-11
- (4) 大倉浩(1995)「狂言記にみるサ行四段動詞のイ音便形」『文藝言語研究』言語篇 27
- (5) 2016年2月29日の野村万作師へのインタビューによる。